

# 国語の指導法

～実際の指導事例を踏まえて～

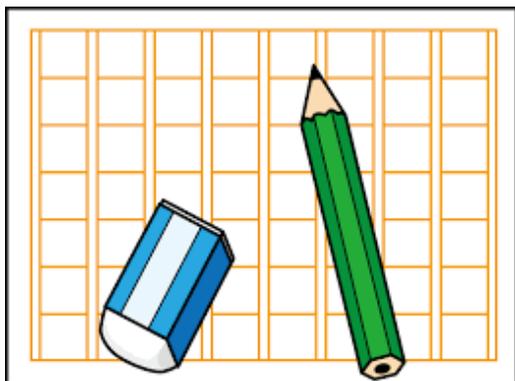
7/21 SNS研修

# 事例 1

## 「読む力の弱い生徒さんへの作文指導」

- 小学6年生 男の子Bくん
- 知的水準は平均。理解力、書く力は年齢相応ある。  
聞く力や短期記憶に弱さがある。
- 作業スピードは速いがミスが多く、考える前にぱっと目に付いたところからやり始めてしまう。不注意傾向がある。

## [相談内容]



説明が少なくて内容がつかめない

文が長すぎて内容がつかめない

普段の会話でも、何を伝えようとしているのかわからないことがあります。



Bくん保護者

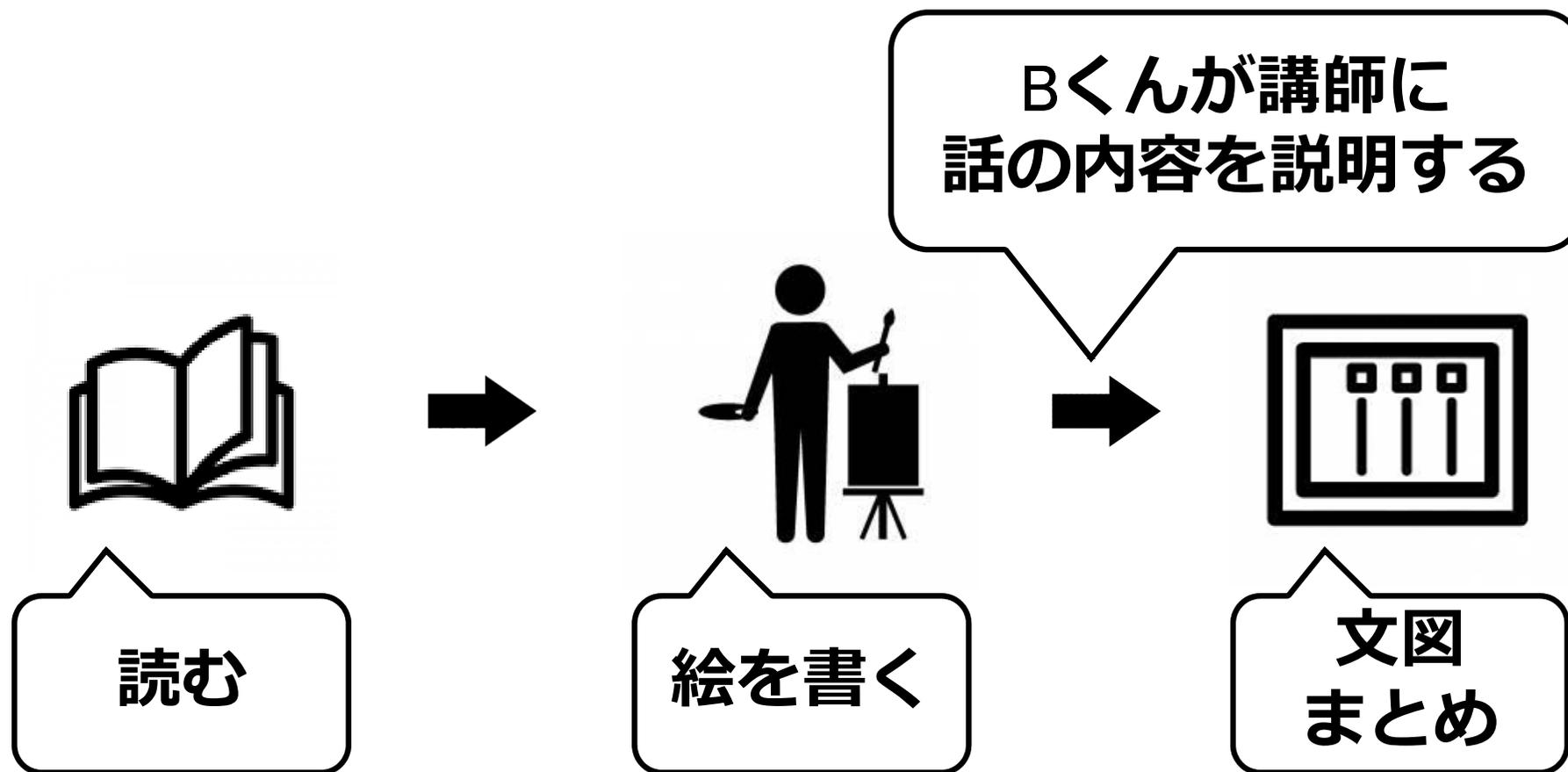
# 作文に必要な力

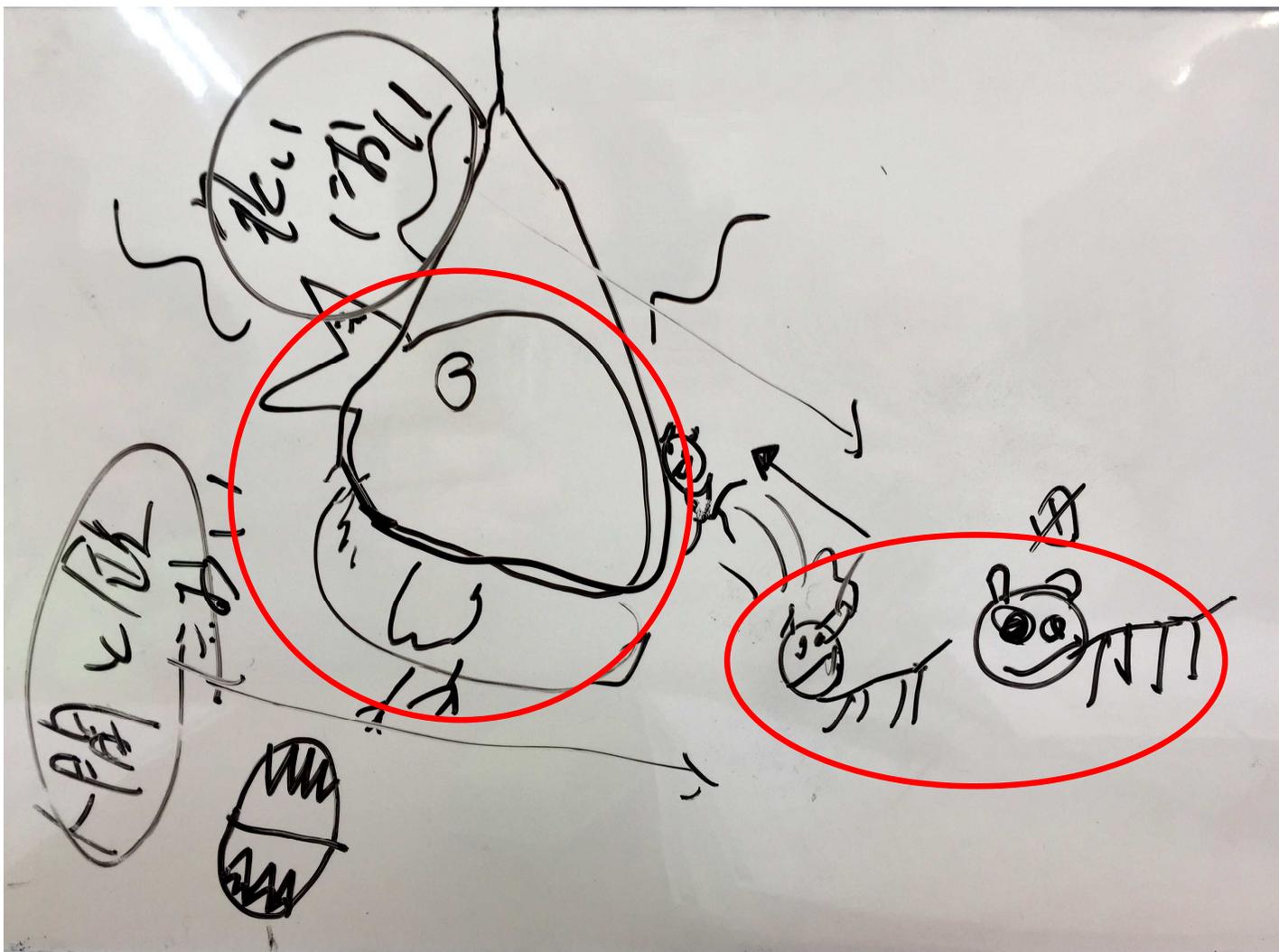
- **語彙力** 言葉を言い換えたり、具体的な内容や、見たものの名前などを書いたりする力
- **表現力** 自分が感じた事も書き加え、文章を際立たせる力
- **思考力** 見えない部分も想像して文章に表す力
- **観察力** 見聞きしたものを言葉で再現できる力
- **構成力** 文章に的確な言葉で肉付けし、文章の順序や語句の順序を考える力

# 作文の発達段階

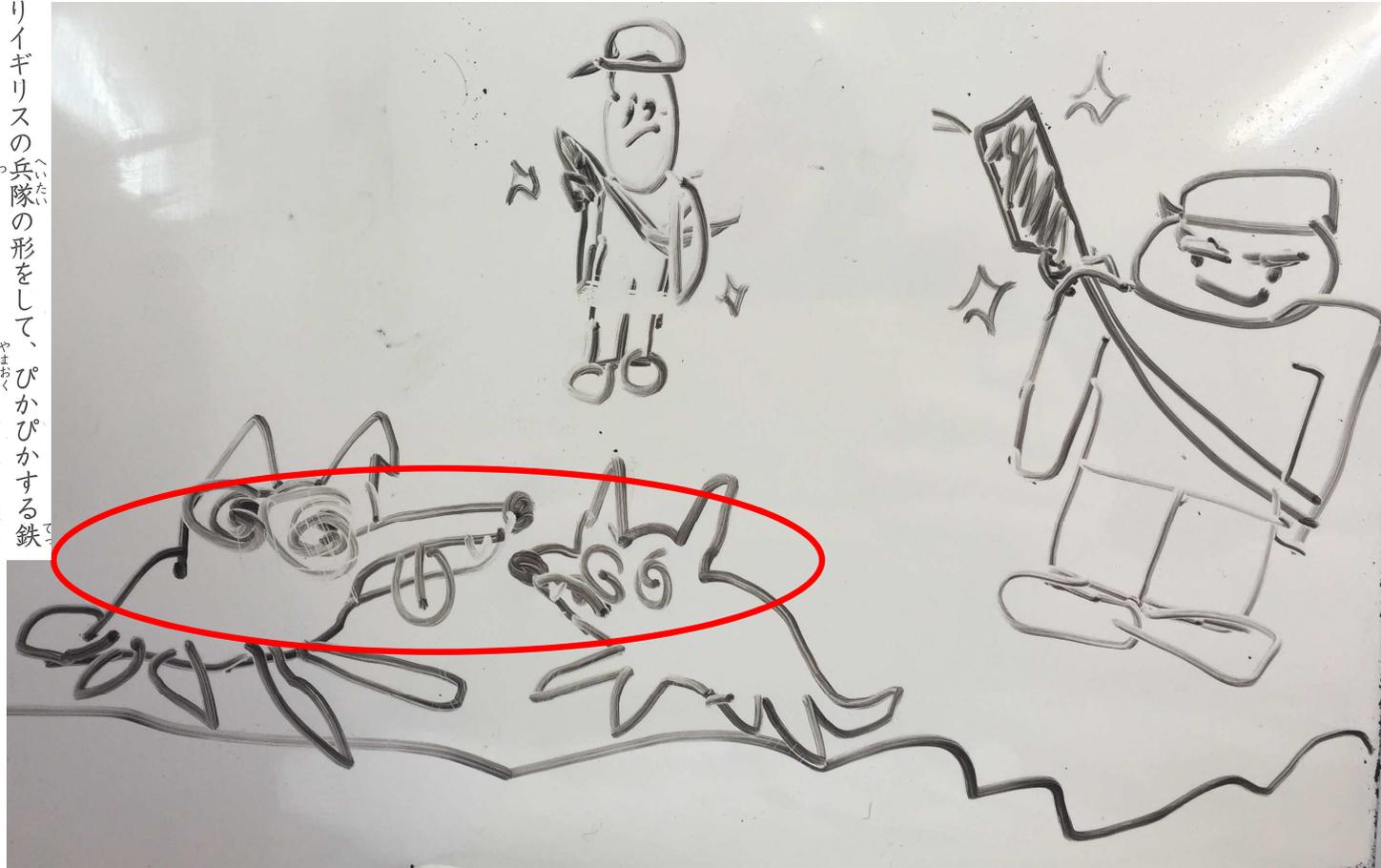


・ 物語文からスタート





注文の多い料理店  
宮沢賢治



二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白くまのような犬を二ひき連れて、だいぶ山奥の、木の葉のカサカサしたところを、こんなことを言いながら歩いておりました。

「ゼンたい、ここらの山はけしからんね。鳥もけものも一ぴきもいやがらん。何でも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。」(中略)

それは、だいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲うちも、ちよつとまごついで、どこかへ行ってしまったくらい山の山奥でした。

それに、あんまり山がものすごいので、その白くまのような犬が二ひきいっしよに目まいを起こして、しばらくうなづいて、それから泡をはいて死んでしましました。

「実にぼくは、二千四百円の損害だ。」

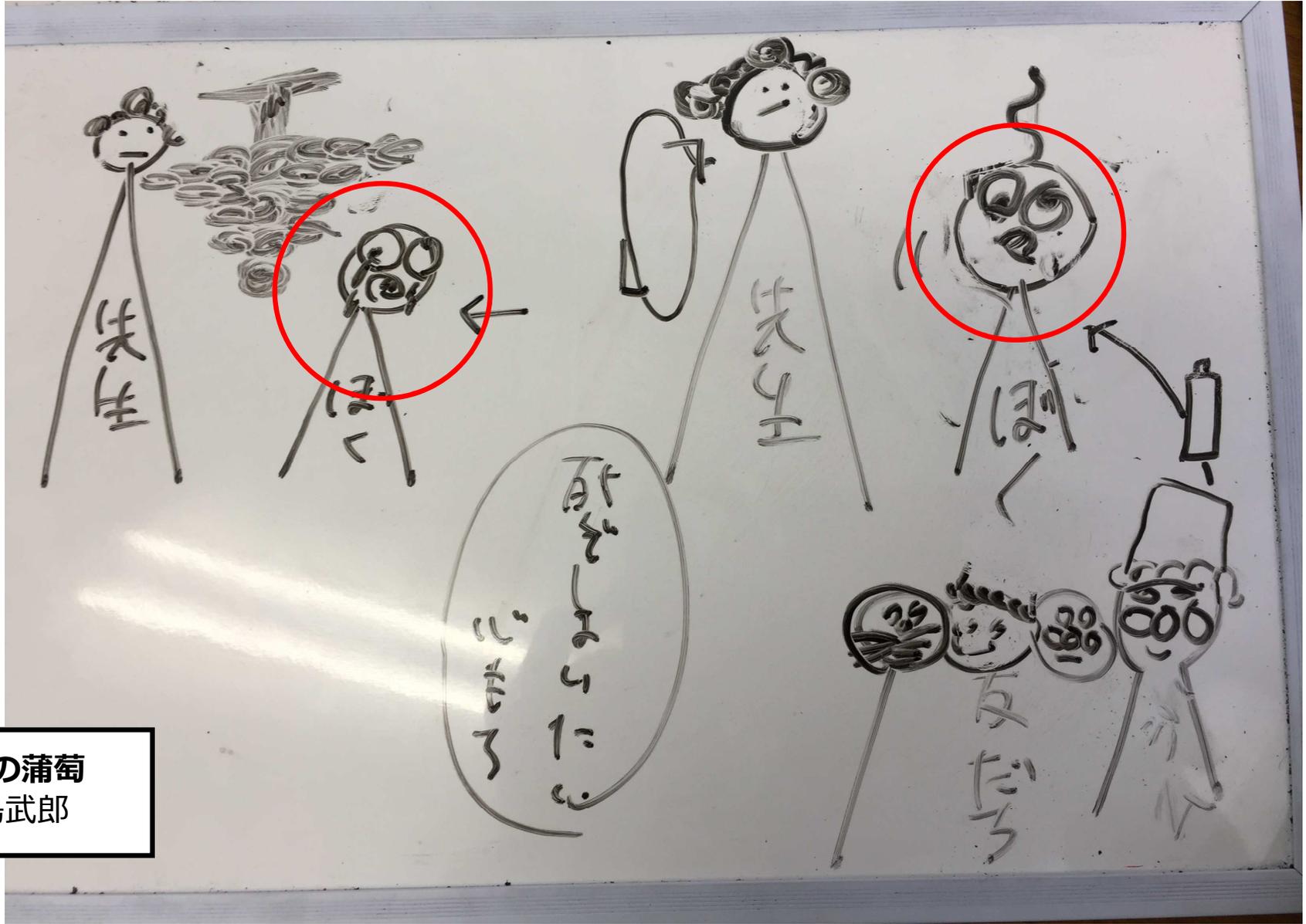
と、一人の紳士が、その犬のまぶたを、ちよつと返して見て言いました。「ぼくは、二千八百円の損害だ。」

と、も一人が、悔しそうに、頭を曲げて言いました。

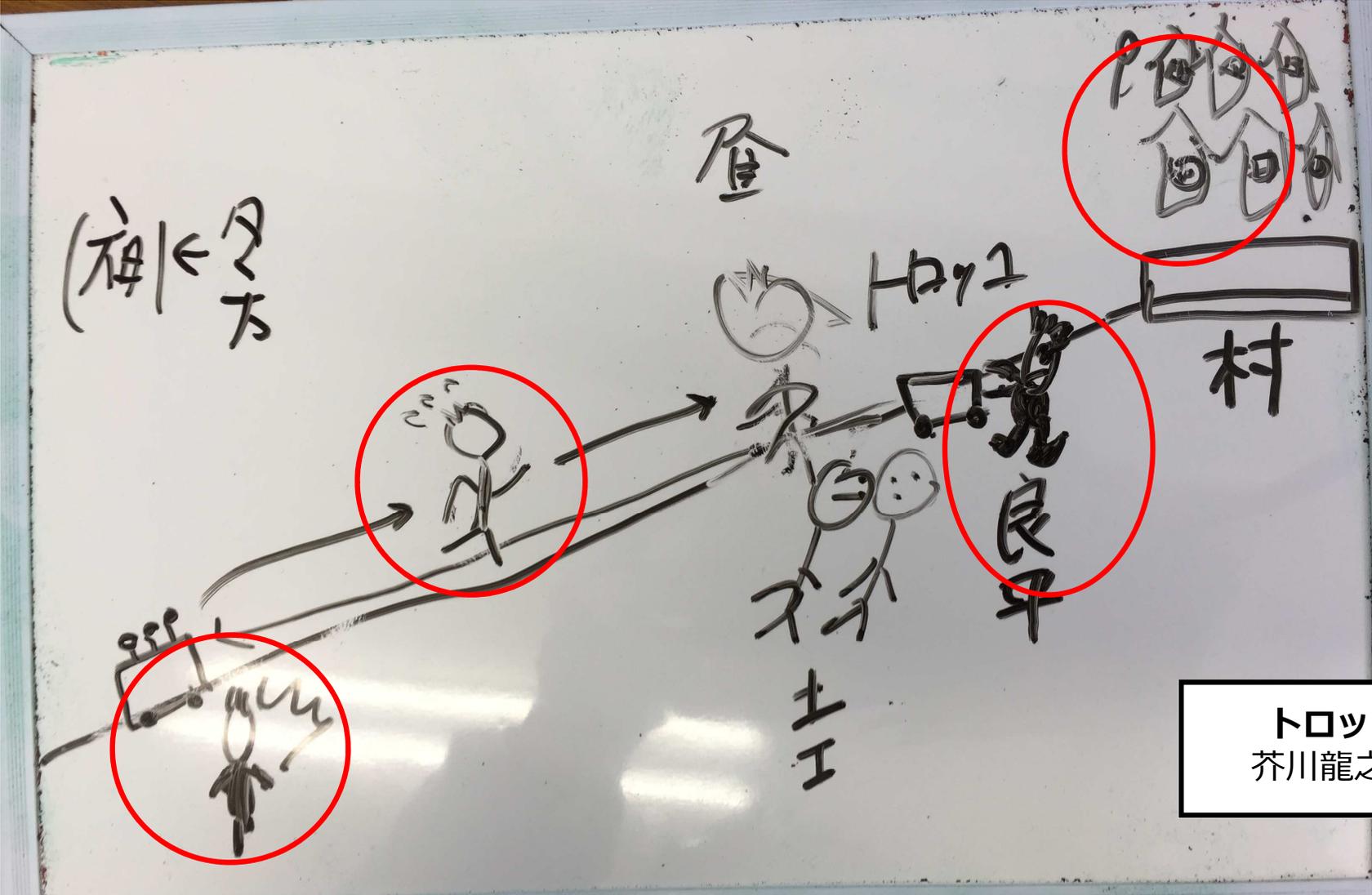
初めの紳士は、少し顔を悪くして、じっと、も一人の紳士の顔つきを見ながら言いました。

「ぼくは、もう、戻ろうと思う。」

「さあ、ぼくも、ちよつと寒くはなつたし、腹はすいてきたし、戻ろうと思

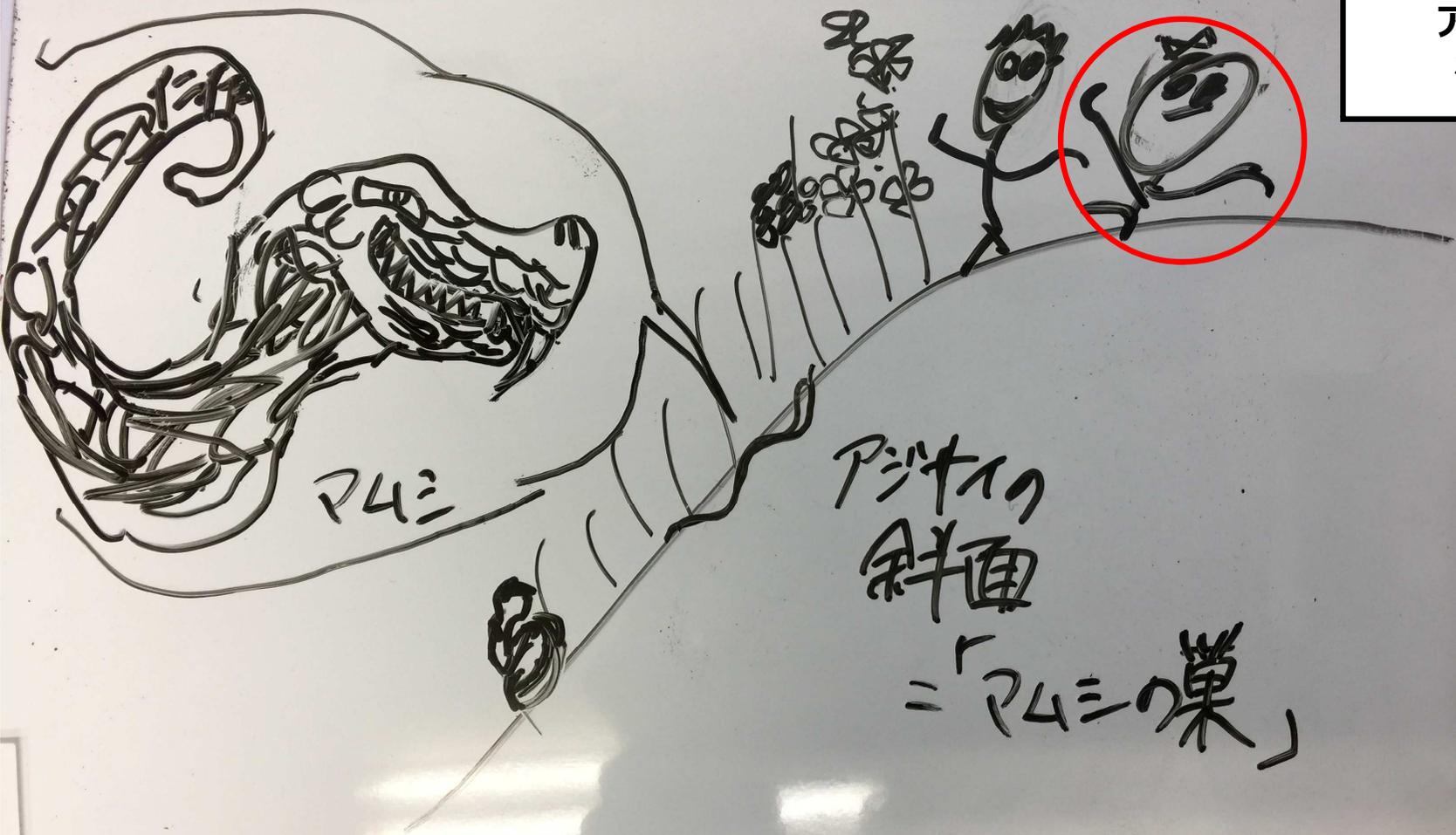


一房の蒲萄  
有島武郎



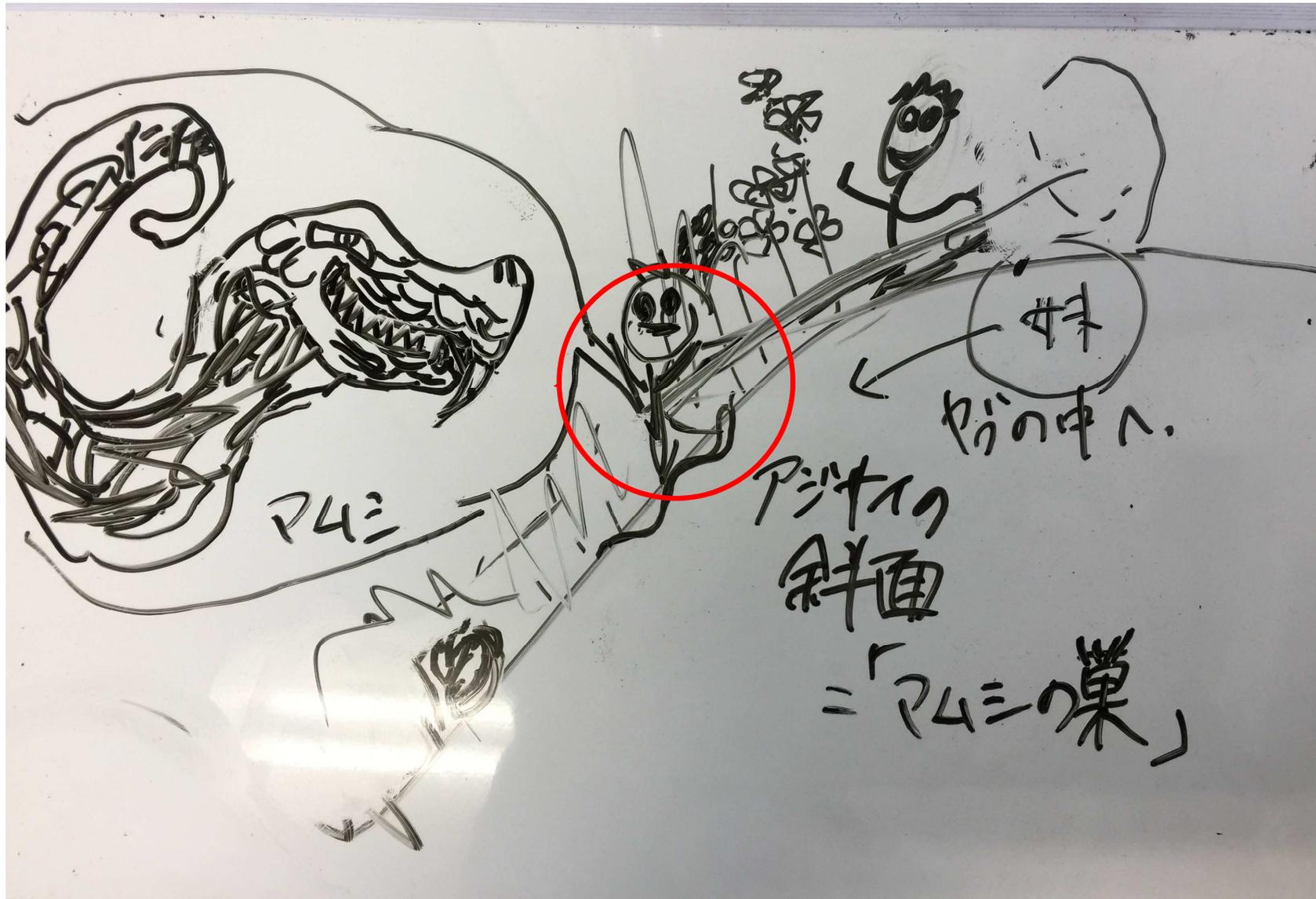
トロッコ  
芥川龍之介

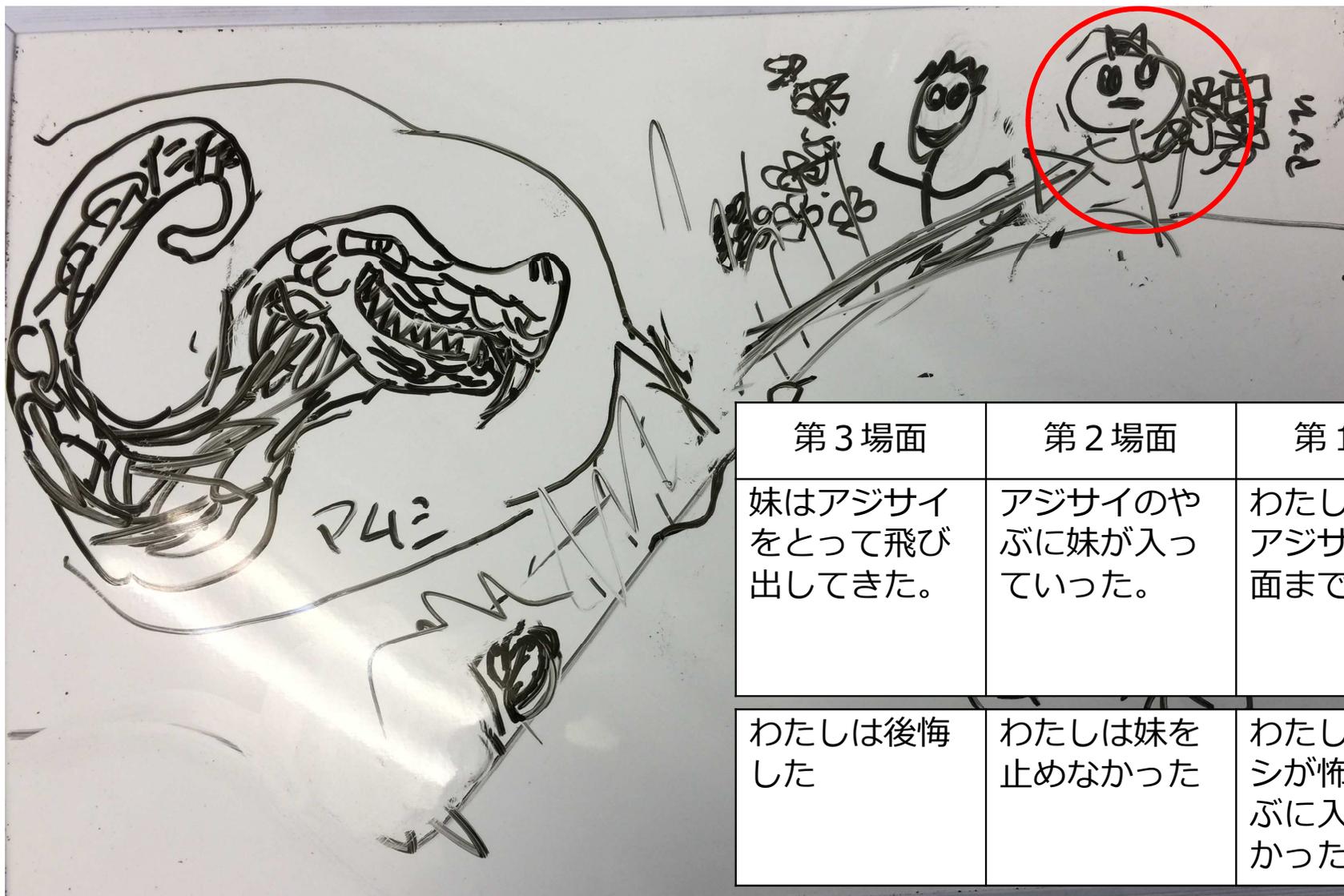
アジサイ  
椋鳩十



アジサイ

アジサイの  
斜面  
＝「アジサイの巣」





第3場面	第2場面	第1場面
妹はアジサイをとって飛び出してきた。	アジサイのやぶに妹が入っていった。	わたしと妹は、アジサイの斜面まで来た。
わたしは後悔した	わたしは妹を止めなかった	わたしはママシが怖くてやぶに入れなかった

## 指導を通して

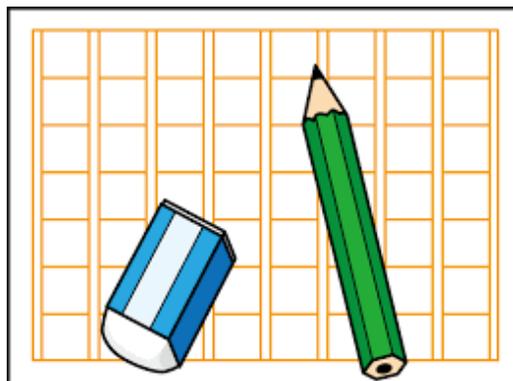
- 文章を読むとき、大切な情報に注目しながら読むようになった
- 場面の転換を把握するなど、要約しながら文全体を把握できるようになった
- 伝えたいことを具体的にイメージし、それを言葉に置き換える意識ができた
  
- たくさんの本を読んでもらうよう、毎日のミニ読書をお願いしています
- 説明文での文図作りにうつる予定です

## 事例2 国広かおり先生より

### 「低学年の生徒さんへの作文指導」

- 小学2年生 男の子Aくん
- 2歳の頃、発達+ことばの遅れを指摘され、2歳半～療育に通っていた
- 現在発達の遅れはほとんどなく、就学前にひらがな・カタカナの読み書き、1ケタ・2ケタの足し算・引き算はひととおりマスター出来ている記憶力が良く視覚認知力が高い
- パターン学習は得意な反面、文章理解や抽象概念の理解は苦手

## [相談内容]



前後の文が繋がっていない

全く内容がつかめない

作文や日記が宿題に出てもなかなか書けません。  
どう声かけをしたらいいのかわかりません。



Aくん保護者

## 事例研究 低学年の生徒さんへの作文指導

国広かおり

先日、低学年生徒さんの保護者の方から、生徒さんが学校で書いた作文を家に持ち帰って来たものを読んだところ、前後の意味が繋がっておらず、全く内容がつかめなかった。また宿題で、作文や日記が出ても、本人もなかなか書けず、保護者の方も、どの様に声かけして良いか分からず困っている、とのご相談をいただいた。

### 作文の書き方 「はじめ」「中」「終わり」の三段構成

低学年は、国語の授業の中で、三段構成で文を書くよう、指導されている。生徒さんには、いきなり文を書き始めないよう、伝える。

#### 1 何について書きたいか、よく考える。

一人で考えるのが難しいようなら、生徒さんとの話し合いの中で、本人が題材を見つけられるよう促す。特に楽しかったこと、嬉しかったこと、頑張ったことが有れば、そのことに心を向けられるようにする。

(こちらが気を付けること。誘導しない。本人の正直な心の思いを引き出せるように。)

2 出て来た事柄を、ノートに書き留める。(いつ、どこで、だれが、の5W1Hにも気を付けながら思い出せるように。)

3 出来事だけでなく、自分の気持ちにも目を向け、それも大切に書くよう指導する。

なかなか気持ちについて考えにくいようなので、今後は気持ちの言葉カード(嬉しい、楽しい、頑張る、優しい、美しい、等のプラスの言葉、悲しい、寂しい、疲れた、怖い、腹が立つ、等のマイナスの言葉)を作成し、それぞれの言葉から自分が思うこと、また思い出す事なども話せる機会を持つ。

※読解問題の時も、登場人物はどの様な気持ちかを問うものについては、全く分からない、とよく言われるので。

## ノート、マスの使い方指導

この点についても、生徒さんがたくさん質問してくれた。

- 1 題は、2～3マス空ける。
- 2 姓と名前の間は、1マス空ける。名前の下は、1～2マス空くように。
- 3 文の書き出しは、1マス空ける。意味のまとまりごとに、行を区切る。
- 4 句読点や、かぎカッコ「」は1マス使う。行の最後に来た時は、そのまま下に付ける。行の始めに持って来ない。促音、拗音も1マス使う。
- 5 会話文の書き始めは、行を変えて書く。会話文の後に続ける文も、行を変えて書く。(原則として)
- 6 国語のノートや作文用紙などの縦書きの時の数字は、漢数字を使う。

## 生徒さんから感じたこと

書きたいことが見つければ、とても生き生きと楽しそうに文を書いてくれる。マスの使い方、改行のことにも気をくばりながら書こうとしている。習っている漢字は、こちらが言わなくても、ちゃんと使うことができる。

## これから

夏休みの機会を利用して、日記や作文をたくさん書けるように。文を書くことが、楽しいと思えるようになって欲しい。

おはさんはおまけを  
とこられて、おまけを  
くれました。



おきたじこく



4月 4日  
はれ

わたじこく



おすしたをたべま  
あしがつたです。  
としてまたのしい一日  
てなガキボンを  
しました。  
とえきめいえんぴ  
をかいました。ゴ  
とへいきました。  
とこでキールホル  
とこでキールホル  
とこでキールホル  
とこでキールホル

